



ウッディエンス
第 71 号
2006 年 6 月 25 日発行
日本木材学会
〒113-0023
東京都文京区向丘 1-1-17
タカサキヤビル 4F
☎ (03) 3816-0396
<http://www.jwrs.org/>

ウッディエンスは次号からメールマガジン形式に移行します。
詳しくは 10 ページをご覧ください。

第 56 回日本木材学会秋田大会のご案内

今年度の大会を開催する秋田からご挨拶いたします。

ご承知のように、今回の大会は 8 月 8 日から 10 日までという日程で開催されます。丁度東北の夏祭りとお盆の間の極めて人々の動きの活発な時期での開催となります。交通機関や宿泊施設などの予約がなかなか難しい季節ですが、お早めに手配されますようお願いいたします。

大会の準備は順調に進んでいます。研究発表の申し込みは 5 月 10 日で締め切りましたが、600 件あまりの申し込みがありました。現在、プログラムの編集もほぼ終わり、要旨集の編集に取りかかっています。日程については学会誌 2 号の会告に記載していますが、例年とは異なり、第 1 日目にポスター発表、学会賞受賞式、シンポジウム、懇親会などが行われ、一般講演や研究会は 2 日目と 3 日目に行われることにご注意ください。また、第 1 日目は秋田駅近くの秋田県総合生活文化会館で行われ、第 2 日以降は場所を変えて秋田大学（工学資源

大会実行委員長 桑原正章

学部キャンパス）で行われることにもご注意ください。

ところで、本大会では運営の面でいくつかの新しい試みをしています。まず、学会内に大会のあり方を検討する委員会を設置していただき、その検討の結果、大会開催における学会本部のまとめ役としての役割を強化していただくことになりました。ま

目 次

- ▶ 第 56 回日本木材学会秋田大会のご案内 … 1
- ▶ 新しい学会大会運営の姿を求めて … 2
- ▶ 木材接着研究会・木質パネル研究会
合同シンポジウム … 5
- ▶ 公開 WS「木質科学の新展開を目指した
プラットフォーム構築を考える」報告 … 6
- ▶ 行事予定 … 7
- ▶ 第 1 回木質科学シンポジウム
「木質と水の接点を考える」を開催 … 8
- ▶ Woodience の終刊に当たって … 9
- ▶ ウッディエンスは
メールマガジンに衣替えします！ … 10

だ試行の段階ではありますが、これにより、大会運営に学会や学会員の意向が反映される体制ができあがるとともに、大会運営のノウハウの継続性を確保するような体制となり、開催地が移動しても担当者の負担が大きくなるものとは期待されません。

また、その他の試行の事項をあげますと、第一に今大会では従来のような印刷された分厚い講演要旨集を作らず、CD版のみにしました。その代わり、講演申し込み時に提出していただいた短い要旨を編集して冊子として、CD版とともにあらかじめ会員の皆様に配布するというやり方にします。今回、7月のなるべく早い時期に各種の資料が会員のお手元に届くようにしたいと考えています。このような方法が担当大学と学会の両者の労力の軽減と、大会の情報の迅速な入手につながるのか、まだ試験の段階と考えています。

第二に、森林学会との連携を促進するため、シンポジウムを共同開催にしました。シンポジウムのタイトルは「森と木と環境—その2」とし、本年4月に行った森林学会と同じタイトルの合同シンポジウムをさらに発展させる内容になっています。すなわち、今回は前回の合同シンポジウムの討議をふまえ、「森林—木材—建築の共同

作業をどう進めるか」、「森林・木材と市民をどう結びつけるか」、「木材学会・森林学会に何を期待するか」などの3つのテーマについてコメンテーターから発言していただき、それを基にして議論を展開することを計画しています。

また、第三に、韓国木材工学会との連携を強めるため、昨年度に引続き韓国研究者を招待する枠を設けました。本年は10名の研究者を学会に招待する予定で、招待者の選考は金潤受会長にお願いしています。なお、韓国からの発表申し込みは口頭とポスターあわせて25題に達しています。さらに、今回はハンガリー（西ハンガリー大学）の研究者が来日する機会を利用して、発表をしていただくことにしました。3題の発表を予定しています。

大会期間中は猛暑の時期に当たりますが、秋田では他の地域に比べると随分しのぎやすく感じられることと思います。これを機会に秋田の自然と食べ物を堪能していただきたいと思います。また、われわれの研究所のある能代市には多くの木材産業が立地しています。これらの工場を見学されることもお勧めいたします。大会担当者一同、皆様を歓迎致します。 ■

新しい学会大会運営の姿を求めて

大会運営検討委員会委員長 鮫島正浩

学会活動において、年次大会は学会誌の発行とともに重要な事業として会則の中でも位置付けられている。しかしながら、これまでは慣例的に大会は開催担当機関を中心に設置された大会運営委員会あるいは大会実行委員会等に発表登録からプログラム編集や要旨集編集、さらに会期中の多くの

企画をお任せする形で運営されてきた。このことについては、それぞれの担当機関の考え方や特徴が良く現れるという長所がある一方で、発表登録方法、発表形式、要旨集の作り方などが必ずしも毎回統一されてこなかったという短所もあった。さらに近年は、情報の電子化やインターネットの普

及などにもなって、発表登録の統一化や要旨集作成についての電子化とその取り扱い方法について毎回ごとに大会運営担当者と執行部あるいは理事会との間で意見調整を行うことがしばしば必要となっていており、大会運営の担当者にとって多くの戸惑いを強いる原因ともなってきた。このような事情を受けて、学会大会について、それぞれに大会において培ってきた経験を継承しながら、より統一的で、しかも円滑な運営方法を模索していくために今期になって大会運営検討委員会が学会本部委員会として設置された。現在、本委員会を中心に、以下に示す項目について検討を進めており、本年 8 月の秋田大会および来年 8 月に予定されている広島大会を試行期間と位置付けて大会運営方法を具体的に改善していくことを目指している。

1) 大会に対する本部の位置付けについて

大会運営準備金として、本部から 50 万円の資金提供を以前から行っているが、さらに大会に対して本部が責任ある立場で望むことを明確にするため、秋田大会から本部執行部にも大会担当者を置き、大会運営委員会との連携に努めている。

2) 研究発表部門について

現在、研究発表分野が 22 部門あり、発表会場数が 15 会場に分かれている。この部門数は多すぎるのではないかという意見もあり、また発表分野の分類についても長年にわたって見直しがされていない。したがって、研究発表部門のあり方について、来年に開催予定がされている広島大会に合わせて改正していくことを検討していく。また、従来からの一般発表に加えて、時代

の要請にあった分野別シンポジウムの設置についても取り上げたいと考えている。

3) プログラム編集について

従来、研究発表のプログラム編集については開催担当機関が中心となっていた。秋田大会においてもこのことは基本的には変わらないが、将来的には学会本部を中心としたプログラム編集委員会を設置することを考えている。その理由としては、前述の研究発表部門の見直しや分野別シンポジウムの設置などとの絡み、学会大会としてのプログラム編集方針の統一化、さらに開催担当機関の負担軽減などが挙げられる。また、プログラム編集を学会本部中心で行うためには新たにプログラム編集用のオンライン・システムを構築することが必要となることから、移行に向け対応期間が必要となるが、出来れば来年の広島大会あたりから移行していきたいと考えている。

4) 要旨集の内容・編集について

秋田大会においては、試行として従来の形式とは異なり文字データとして和文 200-400 字あるいは英文 100-300 字からなる研究発表要旨集を印刷物として配布する。また、これとは別に、従来と同じような形での発表内容を紹介する原稿については発表要旨原稿集として CD 版を配布する。このやり方はあくまで秋田大会における試行として位置付けているが、この結果に基づいて次年度以降のやり方について、J-Stage などの利用を視野に入れながら検討していく。

5) 発表登録方法について

発表登録方法についての大きな課題は、

会員資格との照合、プログラム編集や要旨集作成との関係、そして海外会員や海外からの招待参加者に対する対応である。プログラム編集や要旨集作成については J-Stage の利用と大きく関わってくるし、また海外会員や海外からの招待者については英語版の発表登録ページを用意しなければならないといった問題がある。また、発表登録システムについてはコンピュータのソフト的な実務面も含まれるので学会本部の広報・情報委員会等の協力を得て改善に努めていきたいと考えている。また、海外からの発表者については国際委員会との連携強化が必要となる。

6) 大会の開催時期について

大会開催の時期の選択については、発表者の研究計画、参加者の旅費支出、さらには学会運営上、極めて重要な問題である。これまで慣習的に、通常、大会は春に開催し、東北や北海道地域の場合は夏に開催してきた。しかしながら、春の開催といっても 3 月開催と 4 月開催では年度が異なり、また春の開催と夏の開催が組みあわせると昨年度のように年度内に一度も大会が開催されないといった不都合が生じる原因ともなってきた。このようなことから、大会の開催時期についても統一的な考えに基づいて決定していかなければならない。来年に予定されている広島大会は会場確保の都合上、8 月に開催することがすでに決まっている。したがって、秋田、広島と続いた夏の開催を今後とも継続していくかどうかを十分に議論していかなければならない。夏の開催は参加者の時間的余裕、旅費支出、役員や委員の改選時期などを考慮すると大きなメリットがある。しかし、一方で、夏

に大会開催を恒常化することは、従来、秋を中心に開催されてきた支部大会や各研究会の開催時期の見直しまで議論が展開することも考慮しなければならない。したがって、大会の開催時期については、さらに慎重に議論を重ねる必要がある。

7) その他

その他としてしまうにはあまりにも重要なことであるが、学会大会を通して日本木材学会の今後のあるべき姿を模索していきたい。ひとつは研究会組織の見直しである。例えば、研究発表分野の見直し、分野別シンポジウムの設置、さらに大会プログラム編集等について、各研究会に担当者を選んでいただき積極的に業務参加していただくことが挙げられる。また、大会シンポジウムを通して他学会との交流を深めて新分野を開拓していくことも必要と考えられる。例えば本年の秋田大会では日本森林学会との合同シンポジウムが企画されたが、今後は建築学会やエネルギー学会等、より幅広く他分野との交流を深めていくことも検討すべき課題と言える。その意味でも、大会シンポジウムの開催についても大会開催担当機関と学会本部との連携が必要となる。

以上、今後の大会運営について議論がなされていることを述べてきましたが、会員の方々にとって、大会は研究発表の場、そして交流の場として非常に重要な機会であると言えます。このことを自覚していただき、大会のあり方をともに考えていただければと思っています。また、それぞれの立場から、大会運営のあり方について、学会事務局にメール等 (office@jwrs.org) でご意見をいただければ幸いです。 ■

木材接着研究会・木質パネル研究会合同シンポジウム

独立行政法人森林総合研究所 高麗秀昭

2005 年 12 月 1 日（木）～2 日（金）、つくば市の文部科学省研究交流センターで「第 26 回木材接着研究会・第 3 回木質パネル研究会合同シンポジウム」が開催された。今回は木材接着研究会および木質パネル研究会のはじめての合同シンポジウムであり、「環境問題から見た木質パネルと木材接着」というテーマであった。

初日は、主に木質系廃棄物のリサイクルに関する講演が行われた。まず、海外のリサイクルの現状としてフランスの Mark Irle 氏 から「The Impact of Using Recovered Wood on Heavy Metal Content in Particleboards」という題で講演があった。ヨーロッパの木材リサイクルの現状、特に重金属で処理した木材に関する研究の紹介があった。次に日本繊維板工業会の姫野富幸氏から「日本における木材リサイクルの現状」と題して講演があった。日本国内での木材系廃棄物がどのようにリサイクルされているかが紹介され、木材の再利用率の向上に向けての課題等が述べられた。次に岩手県立大学の内田信平氏による「木造家屋の解体材の行方—岩手県内のある解体工事を例に」という題で講演があった。盛岡郊外の古い木造家屋の解体現場の紹介があった。これらの廃棄物は焼却処理されるが、その様子等が紹介された。

初日の最終講演として、東京大学の小野 拓邦氏から「木質系廃棄物から得られる化学原料」という題で講演があった。液化木材に関する研究を中心に木質系廃棄物の化学原料への展開に関する研究の紹介が行わ

れ、フェノールによる液化などの研究成果が示された。

二日目は、木質パネルや VOC など幅広いテーマで講演が行われた。まず、岩手大学の関野登氏から「木質パネル第 2 次耐久性プロジェクトの進捗状況～プロジェクトの概要および暴露一年目の劣化～」という題で講演があった。木質パネル研究会が中心となり、2004 年度から各地の試験場の協力を得て進めている木質パネルの屋外暴露試験に関する報告があった。次に森林総合研究所の塔村真一郎氏から「木質パネルからの VOC」という題で講演があった。木質パネルではホルムアルデヒド放散が大きな問題となっていたが、それ以外の VOC に関する規制などに関して報告があった。

次に静岡大学の鈴木滋彦氏から「木質パネルの ISO」という題で講演があった。ISO に関する最新の情報や今後の流れなど、木質パネルの ISO 規格に関する動向が紹介された。最後に日本ノボパン工業株式会社の服部和生氏から「高耐水性耐力壁パネルの開発」という題で講演があった。接着剤に MDI を使用したパーティクルボードとスクリュー釘を併用し、壁倍率 3.0 を取得した優れた製品の紹介があった。

両研究会による合同シンポジウムは初めてであるが、接着と木質パネルは両者にとって非常に重要な組み合わせである。今後とも両研究会の協力のもと、優れた成果が期待される。 ■

公開ワークショップ

「木質科学の新展開を目指したプラットフォーム構築を考える」報告

東京大学大学院農学生命科学研究科 山口亜由美、木村 聡

京都大学生存圏研究所が公募するプロジェクト共同利用（研究集会）が、京都大学生存圏研究所と東京大学大学院農学生命科学研究科の主催、日本木材学会の協賛で、2006 年 3 月 22 日に東京大学農学部において「木質科学の新展開を目指したプラットフォーム構築を考える」と題して開催された。講演会は 2 部構成で、第 1 部では木質利用における最先端の研究動向に関して 5 件の講演、第 2 部では木質バイオマス利用推進に関して、現在直面している問題について 5 人のパネラーによる発表および討論が行われた。以下プログラム順に講演内容を概略する。

第 1 部 「新しい研究のシーズを拾う」

東京大学大学院農学生命科学研究科の稲山正弘氏は、耐力壁の義務付けによって構造美が犠牲にされている木造住宅の現状に対し、清水寺の舞台に見られるようなラーメン構造が、木組みによる接合方法によって木材の魅力と耐震性能の両立を可能にしていることを実作をもとに解説した。

名古屋大学大学院生命農学研究科の福島和彦氏は、組織構造レベルの情報と分子（化学）レベルの情報をつなぐことが「木材学」であるという位置づけから、TOF-SIMS（飛行時間型二次イオン質量分析装置）を利用して、樹木細胞壁内の異なる種類のリグニン分子を可視化することを紹介した。

京都大学生存圏研究所の杉山淳司氏は、国内外の異分野の研究者との交流の中で、

個人の特徴または特技を活かすことで得られる成果を意識して行ってきた共同研究について紹介した。

（独）産業技術総合研究所バイオマス研究センターの美濃輪智朗氏は、木質バイオマスのエネルギー化に関して、将来的にはエネルギー作物を素材として利用しつつ残渣部分をエネルギー利用するカスケード型の利用が重要であることを強調した。

九州大学大学院農学研究院の割石博之氏は OMICS ベースのシステム生物学が台頭するなか、白色腐朽菌 *Phanerochaete chrysosporium* のゲノム解析を例に、今後、樹木や菌類の遺伝子・タンパク質・代謝産物を体系的に研究することが 21 世紀のバイオマス研究分野におけるイニシアチブになりうると結論した。

第 2 部パネル討論「木質バイオマス利用推進のために求められる研究課題」

林野庁木材課の岡村和哉氏は、林地残材（間伐材、被害木を含む）の利用方策として、（1）木材生産システムと連携したコスト削減、（2）小規模かつ低コストの変換施設の開発・普及（3）林地残材利用の意義に対する国民の理解の醸成、の 3 点を挙げ、特に、日本の素材生産費が 7049 円 / m³、ドイツが半分の 3500 円 / m³であるという現状を示した。

NPO 法人バイオマス産業社会ネットワークの岡田久典氏は、自治体レベルでのバイオマス利用推進の拠点や人材育成に関し

て、「もみじの葉等をうまくマーケティングした」徳島県上勝村を例に解説し、それらの推進力の担い手は大学がふさわしいと結論した。

秋田県立大学木材高度加工研究所の高田克彦氏も、日本の森林資源が国内消費の大部分を賄えるにもかかわらず、利用されていないことを解説し、同研究所が掲げている「産官学プロジェクトによる資源依存型産業から技術立地型産業への転換」を核にする木質バイオマスの総合的利用に関する具体的な実施例を紹介した。

(独) 森林総合研究所複合材料研究領域の渋沢龍也氏は、木質ボード類が資源の有効利用と環境負荷の低い工業製品であるにもかかわらず、日本の木質系廃棄物の再利用率が 25% と低いことを示した。現在、木質ボード類の原料に占める建築解体材の割合は 1998 年の 33% から 2003 年の 54% に増加しているが、リサイクル利用に関する研究、特に異物の混入や原料適正

に関する研究が課題であるとした。

北海道大学大学院農学研究科の浦木康光氏は、「木質バイオマスカスケード利用」に関する研究プロジェクトで得られたデータを示し、材料開発と同時に Life Cycle Assessment による木質バイオマス利用におけるエネルギーおよび環境負荷に対する評価の重要性を解説した。

今回の研究集会は木質科学に関してゲノム研究から木造建築技術に至る幅広い木質科学分野の研究成果および問題点が議論されたものであったが、共通の目的は有効な木材利用を考えることである。現在、研究は細分化され情報は極めて多様化しており、個人ベースで木質科学の全分野の動向をフォローすることは不可能である。今回のような研究集会を定期的に、また学会等でも行うことにより新たな木質科学に関する研究コミュニティが生まれることが期待される。 ■

行 事 予 定

●第 56 回日本木材学会大会

8 月 8-10 日

会場：秋田大学、秋田県総合生活文化会館・美術館 アトリオン

◎大会中の研究会等

◇機械加工研究会

8 月 10 日 講演会・見学会

◇生物劣化研究会、木材強度・木質構造研究会、木材と水研究会

8 月 10 日 合同シンポジウム「木製道路施設の耐久設計を考える」

8 月 11 日 見学会「秋田市とその周辺の木製土木構造物」

◎バイオマス変換研究会、抽出成分と木材利用研究会合同講演会・見学会

10 月 27-28 日

会場：朝里川温泉 かんぼの宿小樽

第 1 回木質科学シンポジウム「木質と水の接点を考える」を開催

名古屋大学大学院生命農学研究科 佐々木康寿

去る 5 月 20 日、日本木材学会第 56 回通常総会に引き続き「木質科学シンポジウム」が東京大学弥生講堂一条ホールで開催された。

このシンポジウムは、今回を第 1 回として新規スタートする形となるためコーディネータの鮫島正浩氏（東京大学・学会副会長）より趣旨説明があり、同じくコーディネータの一人である杉山淳司氏（京都大学）の司会で進行した。

今回は 3 件の講演があり、まず、磯貝明氏（東京大学）が「紙と水をコントロールする」について、紙を「つくる」、「つかう」場面では必ず水が関与していること、また、紙の力学的性質をはじめとする諸性質は水と大きな関連があることなどを分かり易く説明された。

続いて、鈴木養樹氏（森林総合研究所）の「木の中の水の動態をさぐる」では、樹木を含む木材中の水分の動き・状態を検出する技術について、赤外線、電磁気的方法、打音、超音波、放射線透過などを用いた検出方法が紹介された。木材研究者にとって意外に思われたのが、丸太（および大断面・高含水率材）用の含水率計が存在しないことであった。需要が少ないことや、形状不定形により計測が困難であることなどが理由として挙げられた。また、X 線 CT による含水率の計測原理や同方法による長所短所に関する質疑が交わされた。

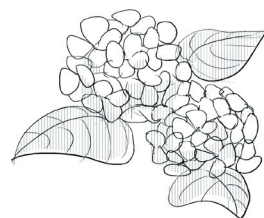
最後の坂 志朗氏（京都大学）による「超臨界水をバイオマス変換に生かす」では、まず、超臨界水とはどのようなものかとい



写真 1 講演する坂氏

うことから始まり、化石資源由来のケミカルの大部分がバイオマス資源から転換可能であること、そしてリグノセルロース資源のエネルギー源への変換法として知られる酸加水分解法や酵素糖化法に変わる技術として超臨界流体技術による変換法が紹介された。説明中、超臨界状態の水に関する動画も示され、大変興味深いものであった。質疑では、超臨界状態形成のための高温・高圧状態の連続的維持および反応制御に関する問題や、エタノール生産プロセスにおけるエネルギー効率に関するものがあった。

本シンポジウムでは専門外の方に対して分かり易い説明となるよう工夫されていたため活発な質疑がなされ、きわめて有意義な会となった。あらためて講演者の皆さんに感謝申し上げます。 ■



Woodience の終刊に当たって

独立行政法人森林総合研究所 大熊幹章

Woodience の新聞形式での発行がこの 71 号をもって終了することである。昭和 61 年の創刊以来、20 年にわたり学会の広報媒体として慣れ親しんできたこの小さな新聞が姿を消すことは、時代の趨勢とはいえやはり寂しさを感じず。もちろん、本誌の役割は電子媒体を通して引き継がれて行くものと思うが、パソコンを開くことが日常の定作業になっていないものぐさ年寄りにとっては残念なことである。郵送される印刷物は必ず手にとって目を通すことになるので、Woodience は木材学会の動きを知る良い旧友であった。

以下に記述する Woodience 誕生の経緯は、手許に資料がない状態で私の個人的記憶をたよりに書くもので、事実関係に誤りがある恐れが多分にあるがお許し願いたい。

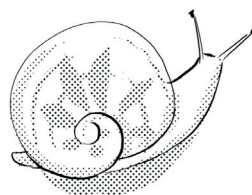
多分、昭和 60 年代に入った頃、私が学会の林産研究教育強化委員会の委員長を務めていたときに、学会活動、そして木材そのものを社会に広報することの必要性が熱く語られ、学会首脳部に広報委員会の設置を提案しようとの結論に至った。私と富田文一郎先生と 2 人で夏の暑い日の午後（昼休みに行われたソフトボールの学内大会の試合に勝利した後）、新幹線で京都に向かい、当時の学会長原田浩先生、佐々木光先生にお会いし、我々の考える学会広報活動の必要性、そのための広報委員会の設置、社会に向けての広報誌の発刊等を直訴したものである。

この直訴を受けて、次年度に広報委員会

の設置が理事会で承認された。確か当時副会長であった杉山英男先生が委員長になられたと私は記憶している。この広報委員会の討議の中で、学会活動、そして木材そのものを社会に広報するために学会誌とは別に、もっと読みやすい広報誌の作成が決められた。この広報誌を新聞形式にすることは私が主張したように思う。広報誌の名称を Wood と Science の新合成語、Woodience と定めたのは杉山先生の提案であったことは間違いない。

創刊当時の Woodience は、あくまでも一般社会の人々を対象にした木材 P R を目的とした外向けのものであった。会員への配布はもちろん行ったが、それよりもマスコミ、大企業等を含めた外部へ向けての配布を大きな目的としていた。しかしこの作業がかなり難しく、その後学会会員向けの連絡誌の性格を強めていったのはやや残念であった。

以上、Woodience の創刊の経緯を私の記憶の範囲で述べた。原田、杉山両先生既に亡く、佐々木先生も私も定年になって久しい。富田先生も今年筑波大を定年退職された。それだけ学会が歴史を重ね、次々と新たな若い力で支えられているわけで頼もしい限りである。学会広報媒体としての Woodience 後継誌の発展を祈念する。 ■



ウッディエンスはメールマガジンに衣替えします！

広報・情報委員会委員長 太田正光

現在の執行部の下で、従来の広報委員会が広報・情報委員会という新体制に移行してから、広報誌「ウッディエンス」のあり方を検討することが、この委員会の緊急の課題でした。この広報誌の創設に尽力された大熊先生の前掲記事にあるように、学会活動ならびに木材そのものを社会にアピールしたいという刊行当初の目的からすると、最近のウッディエンスは会員向けの連絡誌的な面を強めていたのは否めない事実だと思います。

広報誌には本来、新たな会員を獲得し、学会の事業に参加してくれる企業・個人を増やし、社会一般に木材科学の最先端で何が行われているのか情報提供を行い、また、木材を使用することが環境保護にも役立つ云々など啓蒙活動を通じて木材そのものの社会的地位を高めていく、等々の役割が課せられているのではないのでしょうか。

執行部からは、ウッディエンスを印刷物として出すときの対費用効果を見直すように、という暗黙の指示もいただいていた。印刷物を郵送で配布するよりも、インターネット上で PDF ファイルなどで配布した方が、より広い読者に読んでもらえるのではないかということです。

そこで委員会の第一の仕事として、現在郵送でウッディエンスを購読されている、非会員である 526 の送付先に対して、「印刷を止めてしまい、学会ホームページからダウンロードする方式に代えた場合、不都合があるか」をアンケートでお尋ねしました。68 号配布の時に同封したのですが、「地

方在住なので貴誌は大変勉強になっています」というご返事が 1 通で、その他には強い反対意見はありませんでした。また、電子化を受け入れてくださった方が 25 名あり、これらの方には既に PDF 版が発行されたことのみを伝える体制になっています。

一方で様々な事情で今後の送付は不要と回答された方が約 30 名、転居先不明などで戻ってしまったものも 43 通にのぼりました。ウッディエンスは読んでほしいているようですが、反応が今ひとつなのが気になったところです。ウッディエンスは学生会員の獲得も考慮して 26 大学の連絡幹事にも 50 部程度を送っているのですが、こちらも「学生向けには学会活動の内容の分かるポスターのようなものの方がベターである」と言うご意見以外には目立った反応がありませんでした。

こうしたこともあって、さる 3 月に委員会を開催して議論をしました。その結果、現在の印刷媒体は編集に手間がかかり、また要する費用の割に、それに見合った成果が得られていないのではないかと、高度情報化時代の今日、メールマガジンなどの方が、広報活動にはより効果的なのではないかと言うことになりました。

印刷物は止めても、形式はそのまま PDF ファイルを配布するという形式も選択肢としてはあると思うのですが、それですとやはり編集作業に特殊な技術も要求されますし、継続的な広報媒体とはなり得ないのではないかと、ということで、メールマガジ

ン形式に白羽の矢が立った次第です。

こうした方針を総会前の理事会で説明したところ、慎重にした方が良いという意見もございましたが、積極的に賛成というご意見もあり、全体として比較的好意的に提案が認められたと判断させていただき、今回、ウッディエンスのメルマガ化に踏みきることになりました。

メールマガジンの内容は出来るだけ本来の広報の目的に即したものにし、会員連絡誌的な役割は、可能な限り学会のホームページと和文誌に担ってもらえればと考えています。印刷物の場合、記事を書く人は人数的にも限られ、会員が積極的に参加しているという意識を持ちにくいのですが、インターネットの上では、もう少し軽いフットワークで動けます。メルマガを適切に運用できれば、木材科学の分野の発展・普及のために多くの会員が参加することも可能になるのではないかと考えています。

「ウッディエンス」の発行形式をメールマガジンに移行するということをお知らせ

するだけのために、随分と大口上を述べてしまいました。9 月末までには最初のメルマガを発行できると思いますが、メールアドレスを登録していただいている木材学会の会員の方と、既にメール発行通知に移行していただいている読者の方は、特に手続きをしていただく必要はありません。それ以外の方は、是非とも、下記のホームページ・アドレスからメールアドレスを登録していただき、引き続き「ウッディエンス・メルマガ」(名称は変更の可能性もあります)をお読みいただければ幸いです。

なお、会員の方に関しては、学会からの連絡用メールアドレスとメルマガ用のメールアドレスは個別に管理されます。「ウッディエンス・メルマガ」の購読を希望されない会員の方は、購読解除可能なシステムも用意いたしますのでご安心ください。

印刷物としては本 71 号が伝統ある「ウッディエンス」の最終号となりますが、装い新たに登場予定のメールマガジンにも是非変わらぬご声援をお願いいたします。 ■

メールマガジン「ウッディエンス」購読ご希望の方は以下の URL から登録手続きをお願い致します。

<http://www.jwrs.org/woodience/>

日本木材学会広報・情報委員会 (2005・2006 年度)

委員長 太田正光 (東大)

委 員	平井卓郎 (北大)	栗本康司 (秋田木研)	鈴木滋彦 (静大)	尾崎士郎 (鳴門教育大)
	船田 良 (農工大)	木口 実 (森林総研)	吉岡まり子 (京大)	見尾貞治 (岡山木技セ)
	和田昌久 (東大)	近藤隆一郎 (九大)	奥村正悟 (京大)	杉山淳司 (京大生存研)
	岡山隆之 (農工大)	福島和彦 (名大)	竹村彰夫 (東大)	

連絡先 〒 113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物材料科学専攻

電話 03-5841-5248 / FAX 03-5684-0299 (共用)

広報委員会メールアドレス koho@jwrs.org

環境問題に配慮した
鹿印の接着剤・環境資材

OSHIKA 株式会社オーシカ
Adhesives & Construction materials

〒174-0041 東京都板橋区舟渡 1-4-21

TEL 03-5916-8858 <http://www.oshika.co.jp>

営業所 東京・札幌・仙台・新潟・北関東

名古屋・大阪・金沢・広島・高松・九州

日本初!! JAS認定 構造用異樹種集成材

ハイブリッド・ビーム

外層部にベイマツ、内層部に国産スギを使用し
強度等級 E105-F300を実現!

住宅用構造材の専門メーカー

⑬ **中国木材株式会社**

JAS認定工場 LT-1号M.Fc S.Fc / JAS認定工場 LT-313号M.Fc S.Fc

本社／広島県呉市広多賀谷3丁目1-1 ☎0120-707-141
<http://www.chugokumokuzai.co.jp>

新しい素材の切削加工を考える

KANEFUS A

兼房株式会社

本社・工場 愛知県丹羽郡大口町小口1-1 〒480-0192
TEL(0587)-95-2821 FAX(0587)-95-7225
E-mail sales-do@kanefusa.co.jp
<http://www.kanefusa.co.jp>
支社・営業所 名古屋・東京・大阪・札幌・仙台・広島・福岡



ADPAC-SYSTEM

ホルムアルデヒド・VOC放散試験チャンバー装置
テクニカルセンター：分析・代行試験業務

<http://www.adtec-tc.co.jp/>

<http://www.airgood.co.jp/>

ADTEC CORPORATION
有限会社アドテック

〒223-0058 横浜市港北区新吉田東5-66-29

TEL: 045-547-1916 FAX: 045-547-1944

テクニカルセンター：横浜市港北区新羽町1659-202



KRボンド 水性高分子・イソシアネート系
木材接着剤 (水性ビニルウレタン系接着剤)

WATER BASED POLYMER-ISOCYANATE
ADHESIVE FOR WOOD

ISO9001認定取得



努力+ヒラメキ+持続=創造

INSPIRATION WITHOUT EFFORT IS INEFFECTIVE
BUT CONTINUOUS EFFORT PLUS INSPIRATION IS CREATIVE



光洋産業株式会社
www.koyoweb.com

〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町1-9-9 石川ILKビル
Tel.03-3252-1701 Fax.03-3252-1707

● 写真で見る古事記の植物誌
古事記のフローラ

松本孝芳 著 (京都大学名誉教授) **最新刊**
四六判・127頁、口絵カラー4頁、定価1,680円(税込) 送料200円

● 光・音・熱・空気の快適な住環境を探る
住まいのエコ・トータルプラン

楳崎正也 著 (大阪大学名誉教授) **最新刊**
四六判・167頁、定価1,680円(税込) 送料200円



海青社

〒520-0112 大津市日吉台2-16-4
Tel: 077-577-2677 Fax: 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>

森林資源循環型企業

私たちは資源循環型企業としてマレーシアで
アカシア・ハイブリッド植林事業に取り組んでいます。



ウッドエンジニアリングで伸びる

越井木材工業株式会社

大阪市住之江区平林北1-2-158 TEL:06-6685-2061(代)



ここにも、「Made in 日本製紙」。



日本製紙株式会社

www.np-g.com